

令和 4 年 5 月 6 日現在

機関番号：14403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K02360

研究課題名(和文)「女流」浪花節の史的展開に関する研究

研究課題名(英文) Study on historic development of the female naniwabushi performers

研究代表者

北川 純子 (KITAGAWA, Junko)

大阪教育大学・教育学部・研究員

研究者番号：00379322

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、浪花節の展開を「女流」の観点から把捉しようとする試みであった。言説分析と音盤の分析から、これまでほとんど言及されてこなかった過去の女性演者たち(一群の「浪花節芸者」を含む)の存在と彼女達の様式を、浪曲史の中で位置づけるとともに、女性演者が男性に対するのとは異なる評価基準に基づく視線にさらされ、それらを受けとめながら、どのように自らの活動を行ってきたかの一端を明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、一点目に、芸能研究においてこれまで手付かずであった「浪花節における女性」という問題領域を開拓した点、二点目に、ジェンダー研究において、日本の明治期から大正期の浪花節という限定的な分野で女性がどのように活動したのかの一端を明らかにした点にある。

研究成果の概要(英文)：This study tried to regrasp the history of naniwabushi through focusing on "female performers. I clarified the activities of some female performers, including "naniwabushi-geisha" at the Meiji and Taisho eras. From the analysis of the discourse about female performers and analysis of their performance style, I clarified how they were evaluated through the mass media, and how they formed their own carriers.

研究分野：音楽社会学

キーワード：浪花節 女流 ジェンダー 浪曲 浪花節芸者

1. 研究開始当初の背景

本研究の背景となったのは、現況としての浪花節では女性演者が大半を占めているのに対して、浪花節をめぐる書籍や過去の音盤の CD 再発でとりあげられてきたのは圧倒的に男性演者たちである、という齟齬に対する懐疑であった。また、1970 年代以降、「ジェンダー」ならびに「女流」の問題に、複数分野で焦点が定められるようになり、音楽もその中に含まれるようになった半面、日本の大衆芸能の一分野である浪花節に関しては、「女流」という切り口がこれまで意識化されてこなかったということも、研究の背景をなしている。

上記のような問題意識に基づき、本研究は、浪花節の展開を「女流」という観点から把握することによって、新たな側面を浮かび上がらせることができるのではないかと、との着想に基づいていた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、浪花節揺籃期からこんにちに至る「女流」浪花節語りたちの存在を明らかにした上で、彼女たちがどのような視線にさらされてき、そうした視線を受け止めながらどのように自己の様式を形成してき、活動を展開させてきたのか、ということに関して、その一端を明らかにすることにあつた。

3. 研究の方法

本研究は、三つの方法を並行させてすすめた。明治～大正期の新聞・雑誌記事の調査に基づく言説分析、「女流」浪花節語りたちが吹き込んだ SP 音盤の音の採譜と分析、現在活動している女性演者に対する聞き取り調査、である。

に関しては、調査対象に、これまで明治～大正期の民衆文化を扱う際に言説分析の素材の中核とされてきた『都新聞』だけでなく、関西圏の地方新聞記事も含める形ですすめた。

に関しては、他の浪曲師の様式との類似性を、考察にあたっての観点の一つとして採用した。

の対象者は、関東と関西のベテラン女性浪曲師とした。

4. 研究成果

(1)言説分析から導き出されたのは、次の点である。

明治～大正期の「女流」浪花節語りは、①女性だけで一座を組み巡業した者、()男性演者に混ざり口演した者、③浪花節芸者、の三つのカテゴリーにまたがっていた。そして彼女達は、男性浪曲師を基準とした「声」のありかたで判断され、「男並み」であることを高く評価される一方で、男性にはほとんど投げかけられることがなかった「見た目」への評価を強く受けた。浪花節に関しては、現在も「一声 二節(いちこえ にふし)」と言われ、第一に声の良さ、第二に節(フシ)の魅力が評価基準とされてきているが、特に明治～大正期の女性演者に関しては、「美人か否か」を含めた「見た目」がまず評価されたことが、言説分析から明らかになった。

一方で、当の女性演者たちの中には、こうした評価基準を逆手にとり、奇抜な衣装をまったり、啖呵(セリフ部分)で芝居の要素を取り入れたりと、「見た目」も売り物にして自分の口演スタイルを作ろうとする態度も見受けられた。また、人気の男性演者の節(フシ)を自らの様式に取り込んだと考えられる例もあった。さらに、大正期に隆盛した「女流団」に関しては、演目の継承という、基本的に「家」(流派)が同じである場合に許される機能を、この「女流団」という興行形態が担っていた可能性も浮かび上がった。総合すると、「女流」浪花節語りたちは、全体としては「男並みであること」という視線に投げ込まれながら、局所的には、「見た目」を逆手にとったり、「家」とは別の場所で伝承機能を働かせたり、主流の男性演者の節を巧みに加工したりして、そうした視線をすりぬけたり、あるいはそうした視線に対してまなざしを投げ返したりする側面をもっていたと考えられた。以上の考察結果は、論稿「明治～大正期の『女流』浪花節語り」(真鍋昌賢編著 2020『浪花節の生成と展開』せりか書房、pp.119-135)として発表した。

(2)演者への聞き取り調査に関しては、東西「女流」の泰斗である澤孝子師と京山小円嬢師、両氏へのインタビューを実施し、和文・英文でまとめ、明治～大正期の「女流」浪花節語りのリストとあわせて、報告書にまとめた(2020)。とりわけ、両氏のキャリア形成における「巡業」、「女流団」とのかかわりは、浪曲史あるいは近代芸能史全体の中で今後改めて位置づけられるべき、貴重な経験談であると考えられた。なお、インタビュー記事に関して英語版を並記したのは、日本の大衆芸能およびその中におけるジェンダーの問題に今後関心をもつかもしれない海外の研究者へ向けて、一資料となりうる可能性を担保したいとの理由による。

(3)音盤の採譜とその分析に関しては、明治期から 21 世紀までに活動した 5 人の「女流」浪花節語りをとりあげ、演題の採譜と考察を行った。とりあげた浪曲師は、高橋君子、吉田小奈良、初代春野百合子、二代天中軒雲月、二代春野百合子である。

耳で聴こえる限りの口演様式にかんして、特に、女性ならではの演じ方があるというような発見は得られなかったことが、考察に基づく大きな成果であるが、並行して、歴史に埋もれてきた「女流」浪花節語りの存在と個々の口演スタイルを表に引っ張り出すことができた。とりわけ「女流」として初めて音盤吹込みを行ったと考えられる高橋君子(ライロフォン、録音は1911年以前、リリース年は不明)は、これまで浪曲関連の書籍で一切言及されることはなく、存在が知られていなかった演者である。

採譜に基づく分析から、「女流」に限定されない、また個々の個性に還元されない特徴として、以下の事柄が導出された。

一点目に、浪花節の「節(フシ)」(声の旋律)に関して、等価の拍に乗る節と自由リズムの節の二本柱で一席を組み立ててゆくという、現在の浪曲の基本をなす特徴が、高橋君子による音盤でも明確に確認できたことから、このやりかたは浪曲において、早い時期から演者によって意識されてきたと考えられた。

二点目に、二代天中軒雲月による《大石山鹿護送》の様式と、同じ演題の初代雲月、また他の男性演者の録音の比較から、師匠から弟子への芸の継承は、「節」を真似するのではなく、独自の「間合い」を修得するという点にあるのではないかという仮説が導かれた。

三点目に、今回分析対象とした音盤の中で、唯一、第二次世界大戦後の(相対的に{新しい})ものである二代春野百合子《梶川大力の粗忽》は、三味線だけでなく箏も伴奏に用いているが、二つの楽器の役割の相違が意識されて使い分けが行われた上で周到に一席が組み立てられていると考えられた。浪花節の録音物という媒体が、その史的展開のなかで、事前に企図された「作品」プランの実演記録という性格を強めたとの見方も成り立つと考えられた。以上の内容は、報告書『「女流」浪花節の史的展開に関する研究(補遺) 女性浪曲師による音盤:採譜と考察』(2022)として公表した。

(1)から(3)までを総合して、これまでその存在がほとんど語られることのなかった「浪花節芸者」ならびに高橋君子を含む女性演者たちを、浪曲史の中で初めて位置づけたこととあわせ、明治期以降の「女流」浪花節語りたちが、どのような視線を投げかけられてき、そのなかでどのように自身の様式を展開させてきたのかという問題について、断片的にはあるが、複数の角度から解きほぐすことができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計4件

1. 著者名 真鍋昌賢(編著)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 せりか書房	5. 総ページ数 335
3. 書名 浪花節の生成と展開	

1. 著者名 北川純子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 報告書のため出版社なし	5. 総ページ数 248
3. 書名 「女流」浪花節の史的展開に関する研究	

1. 著者名 北川純子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 報告書のため出版社なし	5. 総ページ数 56
3. 書名 澤孝子 浪曲を語る	

1. 著者名 北川純子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 報告書のため出版社なし	5. 総ページ数 157
3. 書名 「女流」浪花節の史的展開に関する研究(補遺) 女性浪曲師による音盤:採譜と考察	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------